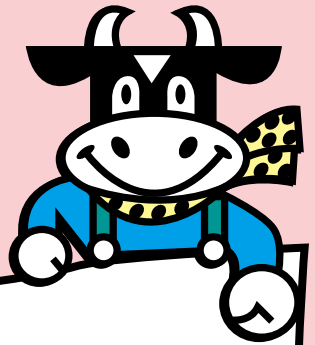


ワンポイント・アドバイス



小型ピロプラズマ病

ちよつと季節はずれですが、小型ピロプラズマ病と言えばダニ熱やピロなどと呼ばれて古くから知られている放牧病のひとつです。近年は発生数や重症例は少なくなっていますが、汚染された放牧地では今でも見かける病気です。一昨年、昨年と発症例を見たので、来春に備えて改めてこの病気を紹介したいと思います。



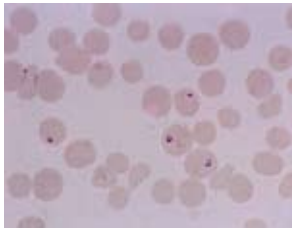
フタトゲチマダニ

〈原因と感染〉

小型ピロプラズマとは正確にはタイレリアという原虫のことです。原虫とは病原性のある単細胞の寄生虫のことで、コクシジウムやクリプトスポリジウムがこの仲間に入ります。

このタイレリアが吸血昆虫のマダニの唾液腺で発育、増殖し、吸血する際に牛の体内に侵入します。侵入したタイレリアはリンパ節や白血球で様々な形態をとりながら増殖し、赤血球内に侵入します。これを別々のダニが吸血して他の牛へ感染を拡大していきます。

マダニは5月から6月が最も活発になるため、



赤血球内の小型ピロプラズマ

放牧期の発生が多いですが、舎飼期でもウシホソジラミが媒介すると言われています。また、垂直感染（親から子へ）の可能性も報告されています。

〈症状〉

タイレリアが感染しても多くの場合は発症することなく、不顕性感染の状態で過ごします。しかし、重度の感染や他の病気の二次感染、放牧馴致の不足、妊娠、分娩や輸送などのストレスが発症の引き金になります。

主な症状は発熱と貧血で、重症になると食欲不振や黄疸が見られます。慢性化すると栄養障害が起こり、発育不良になります。結果的に放牧地で流産したりします。

〈治療〉

現在残念なことに以前から使われていた治療薬が生産中止となり、他の動物薬を流用するしか治療法がありません。重症例では輸血や補液、強肝剤や強心剤投与などが必要となります。

〈予防〉

マダニがこの病気の媒介者であるため、マダニを少なくすることが有効な予



草の先端に集まるマダニ

〈その他〉

北海道では年々増え続けるエゾシカが問題になっていますが、このエゾシカにもマダニがつきます。その行動範囲は広く、放牧地で牛と一緒に草を食べているのをよく見かけます。そのエゾシカが汚染されたマダニを放牧地へ持ち込む危険性があると考えられます。放牧地への野生動物の侵入防止対策も重要となります。

また、生産中止になった治療薬をメーカーが再び生産するかもしれないという話もあり、この古い病気が少しずつ動き出しているような気配を感じます。どんな病気も早期発見と対策が重要です。気になることがありましたら共済組合へご相談ください。

防法となります。草地管理の改善と抗ダニ剤の投与が重要です。草地更新したり、休牧すると良いとされていますが簡単ではありません。抗ダニ剤はイヤータグやフルメトリン製剤（バイチコールなど）の背中にかけるブアオンタイプのもので、定期的な牛に投与することで徐々に牧野の清浄化を進めることができます。また、牛に与えるストレスを軽減することも発症を抑えるのに有効です。